

郊外の果てへの旅／混住社会論

## 序 郊外と混住社会

「混住社会」というタームが使われ始めたのは一九七二年度の『農業白書』からだと言われている。

七〇年代初頭の日本の農業は、世界に例を見ない六〇年代以降の高度経済成長の激しい照り返しを受け、非農業部門との土地や水などの資源利用をめぐる競合の激化、地価の高騰、農業就業者構成の老齢化、後継者の離脱と不足などの多くの深刻な問題が生じていた。

その問題のひとつが「混住社会」であり、それをタームの発祥の地である七二年の『図説農業白書』（農林統計協会）が次のように分析している。

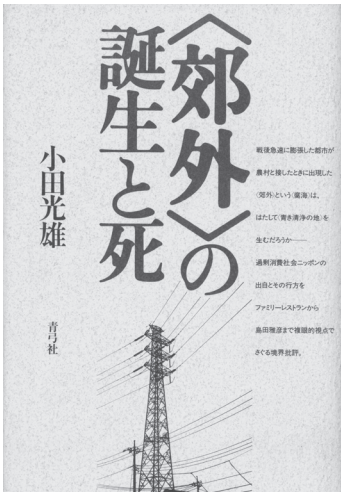
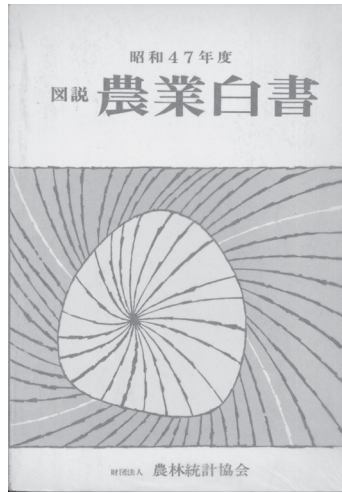
今日の農村社会は、都市化が広範に浸透しつつあるなかで地域的に異なった様相を示しながら複雑な変ぼうを遂げつつある。大都市近郊地帯では、土地の農業的利用と都市的利用の混在や通勤兼業農家の増大等を通じて農

村社会は専業農家、兼業農家および非農家の混住する地域社会へと変ぼうしつつあるばかりでなく、動植物の生育環境の悪化などに伴い農業生産活動の円滑な遂行を困難にする要因が増大している。このような傾向は、都市化の進展等に伴い都市近郊地域からそれ以外の地域に次第に波及しつつある。

これは一九六一年に公布された農業基本法に基づき、国会に提出された「農業の動向に関する年次報告」の一節である。ここから「混住する地域社会」＝「混住社会」なるタームが立ち上がっていくわけだが、官製用語としても、この「混住社会」という言葉は、その後の日本社会を考えるキーワードのひとつに数えることができるほど、有効なコンセプトを保ち続けたといえるだろう。もちろんそれは文章も含め、分析や叙述に官僚的スタイルが投影されているにしても、「今日の農村社会」に起きつつあったドラマティックな変化に対し、真摯な眼差しが向けられていたことによると思われる。

「混住社会」という新しい言葉が生み出された背景には、都市近郊において、農家と非農家が混住する地域が急増し、七〇年の農林省の農業集落調査によれば、農家と非農家の割合が46対54で、非農家のほうが多くなっていたことが挙

げられる。一九六〇年には61対39だったのである。そしてこの傾向は七五年には30対70という結果に至り着いていた。柳田国男が一九二九年に著わした『都市と農村』（『柳田国男全集』29、ちくま文庫）というタイトルが象徴している



ように、都市と農村は経済的に対立するものであり、社会的にも空間的にも分離されていた。それは戦後も変わることなく続いてきたが、六〇年代になって『白書』の指摘するごとく、「地域的に異なつた様相を示しながら複雑な変ぼうを遂げつつある」事態を迎えていたことになる。

長きにわたつて農業を中心とし、農家を主要な構成員とする均一な地域社会であつた農村が変貌していくこと、それを具体的に示すならば、農村の風景の変化に表われている。つまり田や畑だつた場所に工場や会社が建設されたり、団地や建売住宅地域が開発されたり、あるいはスプロール的に様々な職種から形成されるサラリーマンのマイホームやアパートが建ち並んでいくことを意味していた。そうした風景の転換は六〇年代から広範に起き始め、七〇年に至つて農村は流入人口のほうが多くを占めるようになった。それは風景だけでなく、生活の混住でもあつた。その結果、かつての農村は変貌し、都市でも地方でもない、あるいは村でも町でもない郊外混住社会を出現させつつあつたといえる。

それらの現象とパラレルに、敗戦後には1600万人を超えていた農業就業人口は七五年には急減し、700万人を割つてしまい、皮肉なことにそれは農業を保護するための農業基本法の成立と歩みをともしたといえよう。その

かたわらで、戦後の日本社会はこれまで体験したことのない世界へと離陸し始めようとしていた。

それは消費社会化である。五〇年に50%近くを占めていた第一次産業就業人口は七〇年代を迎えて20%を割り、その代わりに第三次産業就業人口に至っては七三年に50%を超え、日本もまた欧米先進国と同様に消費社会化し、ソフト・サービス社会へと向かっていった。しかも七三年とはオイルショックが起き、重工業を中心とする高度成長期に終止符がうたれた年でもあり、それは脱工業化社会への移行を示唆していた。

その消費社会化はモータリゼーションの進行ともパラレルで、七五年には二世帯に一台の乗用車保有となり、その他の耐久消費財と同様に家庭の必需品と化していったのである。つまり混住社会⇨郊外の誕生は車をベースとする消費社会化を伴っていたことになる。それらを背景にして、ファミリーレストランを嚆矢とするロードサイドビジネスが次々と簇生していく。これは駐車場を備えた郊外型商業店舗の総称であり、当初は異なっていたファストフードやコンビニも郊外を主たる出店の場合へと移し、それらに続いて、様々な物販やサービス業が加わり、郊外は八〇年代を通じて、大衆消費社会を造型していくことになる。

それゆえに八〇年代になって、かつて田や畑だった郊外

の幹線道路の風景は、アメリカを出自とするロードサイドビジネスで埋め尽くされてしまい、ここでも様々な物販やサービスの混住現象が起き、ロードサイド商店街の急速な形成を見ることになったのである。それは膨大な消費者たちを召喚し、誕生させた。この郊外消費社会の成長と隆盛が、従来の町の商店街を壊滅へと追いやる要因となったことはいうまでもないだろう。そして九〇年代になると、地域によつてはこの混住社会の住人として日系ブラジル人たちも組みこまれていった。それも労働者、生活者、消費者としてだった。多彩な容姿の彼らの出現は郊外のアメリカ的風景と相俟って、農村だった過去が異国のような感慨をもたらしした。

このような七〇年代に顕著になった混住社会から始まる郊外の物語と歴史について、私は一九九七年に『郊外』の誕生と死』（青弓社、復刊・論創社）で詳述しておいた。それは農村⇨混住社会⇨郊外の誕生⇨ロードサイドビジネスの出現⇨郊外消費社会の到来という流れをたどり、その流れに伴って現われたアメリカ的風景と郊外文学の発生に言及し、バブル経済の終焉と郊外消費社会の飽和、過剰消費社会に迫りつつある少子高齢化と人口減少によつて、郊外も緩慢な死へと向かいつつあることを示しておいた。その「あとがき」を記している時に、郊外のデッドエンドとその

ゾーンを暗示するかのようになり、ヤオハンの倒産と酒鬼薔薇事件が起きてもいた。それから十五年が経ったことになる。

そして他ならぬ二〇一一年の東日本大震災と原発事故によって、郊外は死へと追いやられてしまったのである。それゆえにあらためて、郊外の混住社会のバックヤードにはシーサイドに位置していても、ロードサイドビジネスに他ならない原発が控えていたことに気づかされたのだ。各電力会社による原子力発電所⇨原発が次々と建設され、営業運転を開始したのも七〇年代であり、それは郊外の誕生と併走していた。調べてみれば、原発との混住を背景にして、郊外の成立と郊外消費社会の成長はあつたとも考えられる。とすれば、郊外の誕生とは、死に至る危機を最初から内包していたことになり、その事実を、3・11は明らかにし、それが東日本のみならず、日本全体の郊外の構造であることも露呈させてしまったことになる。

拙著を上梓した一九九七年の時点では、続けて『〈郊外の誕生と死〉の歴史を書くつもりでいた。それは十九世紀後半のフランスの百貨店の誕生から、二十世紀前半のアメリカのスーパーの展開による消費社会化、戦後の郊外の膨張とロードサイドビジネスをテーマとするものであつた。

それに加えて、拙著で言及できなかった文学、映画、写真、コミック、資料を媒介として、近代日本の郊外の起源、

欧米などの郊外の歴史をたどり、さらに広範に郊外を捉えるつもりでいた。それは同時に郊外の果てへの旅を意味するものでもあつた。しかし図らずも、『〈郊外〉の誕生と死』の応用編として、たまたま出版状況論を書いたことによつて、そちらのほうに時間をとられてしまったこと、それに続いて十九世紀の消費社会と近代の欲望を描いたゾラの『ルーゴン⇨マッカール叢書』の翻訳に没頭したこともあつて、そのまま長きにわたる中断という事態にならざるをえなかつた。

しかしダイレクトな体験ではないにしても、3・11を経てきたこと、私も福島の人々と同様に、原発の近傍にあり、もし大地震が起きれば、同じような災厄に見舞われることが予想される。それは原発を近傍にして、しかもその被害が及ぶ近傍とは30キロ圏と想定されているので、郊外で生活している人々すべてに共通している危機だと見なせよう。そしてこれも原発における都市と農村の構図を想起させるのだ。それらをつまみえ、もう一度、郊外文学⇨混住小説を考えてみたい。拙著では六七七年の安部公房の『燃えつきた地図』（新潮文庫）から八三年の島田雅彦の『優しいサヨクのための嬉遊曲』（新潮文庫）までを論じておいたが、ここでもれた作品、それ以後の作品をたどることで、あらためて混住社会と郊外文学の意味を考察してみようと思う。

# 1 郊外の孤独な女たち

——桐野夏生『OUT』前編〔講談社、一九九七年〕

桐野夏生の『OUT』を最初に取り上げたのは、この作品が『(郊外)の誕生と死』の上梓とほぼ同時に刊行されていることに加え、私が本書の「序」で示した一九八〇年代に顕著になり、九〇年代に入って定着した郊外の風景やファクターが出揃い、『OUT』という物語のフレームとバックヤードを形成しているからである。それはまったく同世代の桐野と私が同じ問題意識を共有しながら、やはり同じ時期に郊外をテーマとする小説と評論を書き続けていたことを意味していよう。

その事実はともかく、桐野の『OUT』において前提となっているのは、タイトルにこめられているように、まさに郊外が「OUT」の空間を表象していることだ。この英語の副詞の「OUT」は多くの意味を含んでいるにしても、ここでは「外れて」「狂って」「間違つて」といった訳語と解釈を採用すべきだろうし、それは物語と登場人物たちに

もそのままではまるものである。それは九〇年代にはいつて起きたバブル経済の崩壊、阪神・淡路大震災、オウム真理教事件なども否応なく反映されていると見なせるだろう。

そして『OUT』は「駐車場には、約束の時間よりも早めに着いた」と書き出されていくのだが、その冒頭の文章に続いて、まず登場人物たちが働く弁当工場が出現する。それは次のように説明されている。

弁当工場は武蔵村山市のほぼ中央、広大な自動車工場の灰色の塀が続く道に面してぼつんと立っている。周囲は埃っぽい畑地と小さな自動車整備工場群。空のよく見える平べったい土地だ。工場の駐車場はさらにそこから徒歩で三分、荒涼とした廃工場の先にある。

物語の進行につれて、この何気ない叙述と描写の中に、「弁当工場」が物語の重要な象徴的トポスとして、すでに提出されていることに気づかされる。

それゆえに引用部分に表出している固有名詞に注釈を施しておこう。

「弁当工場」はコンビニのためのもので、昼夜稼働し、深夜でも「不夜城」のように蛍光灯の照明を青白く輝かせ、



聳えていた。百人近い夜勤者は三分の一がブラジル人、その他のほとんどは四十年代、五十代の主婦のパートだった。業態とすれば、コンビニをめぐって形成された協力企業の工場、コンビニコングロマリットの一社と見なすべきだろう。

それは武蔵村山市に位置している。『1996年版民力』（朝日新聞社）によれば、「武蔵村山都市圏」は自動車などの工業とみかんやなしの観光農業が主たる産業で、近年の大規模な都営住宅の建設や大型工場の進出を機に「変転した住工都市」と説明されている。これらの事実は「武蔵村山都市圏」が中央線沿いの三多摩地域と異なり、八〇年代から九〇年代にかけて急成長したことを告げていよう。これは一九六五年に首都圏整備法が改正され、実質的に当初

の田園都市的構想は否定され、郊外のさらなる開発が是認されたことと連鎖し、七〇年代以降に「武蔵村山都市圏」へとも波及してきたことを示唆している。

また私も『〈郊外〉の誕生と死』で、都心と武蔵村山市を結ぶ新青梅街道が八〇年代末に、全国でも有数のロードサイドビジネスの集積地であることを紹介しておいたが、それは『2002-3年版 首都圏ロードサイド郊外店便利ガイド』（昭文社）に掲載された武蔵村山市と新青梅街道の地図を見ると、さらに実感してしまう。残念なことにコンビニは収録されていないけれど、ロードサイドビジネスの驚くほどの増殖と群棲から考えても、同様に多くのコンビニが存在しているはずだ。「弁当工場」の前にとまっている白いトラックは、おそらく新青梅街道を中心とするコンビニに向けて、弁当を迅速に運んでいくのだろう。コンビニの名前は出てこないのだが、「弁当工場」のメニューやシステムからすれば、それはセブンイレブンではないだろうか。

「広大な自動車工場」とは日産自動車だと見なせば、カルロス・ゴーンによるリストラが始まっていて、それが「小さな自動車整備工場群」へとも跳ね返っていくことを暗示しているかのようだ。これはその後に記載される「荒涼とした廃工場」にも象徴されているようにも思える。その実態



は引用部分に出てこないが、「夏草の茂る暗渠の向こうに廃屋となつた旧弁当工場や閉鎖されたボーリング場などが続く、寂しく荒れた場所だった」との言及が後に見られる。

「旧弁当工場」はコンビニの急激な成長によって生産が追いつく規模ではなくなり、撤退してしまったもの、「閉鎖されたボーリング場」は七〇年代のボーリングバブルの痕跡である。いずれも郊外特有の土地活用の関係から解体費が捻出できず、そのまま捨て置かれていると考えていい。

そこは痴漢が出没し、パート主婦たちが被害に遭っていた。その右手には農家や小さなアパートが並び、後者には工場で働くブラジル人たちが住んでいた。夫婦者が多く、ポルトガル語で喧嘩する男女の声が聞こえてきていた。工場やアパートの周囲にある「埃っぽい畑」や「庭の広い農家」といった記述から、その一帯がかつては農村だったことが伝わってくる。

そして「駐車場」。前述したように『O.U.T』は「駐車場には、約束の時間より早めに着いた」と書き出されている。ヒロインの雅子がまずそこに登場する。「駐車場は簡単に整地しただけの広い空き地」で、弁当工場の従業員やパート主婦たちの車が停められ、雅子も車体に傷のある古いカローラで通っているのだ。これも拙著で既述しているが、車社会の進行に伴い、一九九三年に乗用車保有台数

は4000万台を超え、九四年に女性免許保有者は2400万人に至り、その結果、男女運転免許保有者割合は57%対43%となっている。これは雅子たちもそうであるように、八〇年代から女性も自ら車を運転し、通勤したり、買物に出かけることが日常化した事実を告げている。

また実際に一九八二年に有配偶女子有業率は50・8%と半数を超え、「働く主婦」が「専業主婦」を上回り始めていた。それはパート主婦を主たる労働者とするロードサイドビジネスに代表される郊外の就業状況を反映している。これは八〇年代における郊外とロードサイドビジネスと車の三位一体の成長を物語るものであり、『O.U.T』の「駐車場」も作者が意図的でないにしても、それらの八〇年代から九〇年代にかけての社会の変貌の一端を表出させていることになる。

この「駐車場」から「弁当工場」へは徒歩で3分だが、その道行は「寂しく荒れた場所」を通つていくゆえに、暗く凶々しいイメージがつきまとっている。それは「午前零時から朝五時半まで延々と休みなく、ベルトコンベアで運ばれる弁当を作り続けなければならない。パートにしては高い時給だが、立ちずくめのきつい作業」が待っているからだ。そればかりか、その「寂しく荒れた場所」で、雅子は日系ブラジル人に襲われたりもするし、そこはまた物語



のクロージングの場、不可欠の舞台としての機能を果たすことになる。いや、考えてみれば、一貫して『OUT』のすべての舞台となるところは「寂しく荒れた場所」に他ならないのだ。

さらに日系ブラジル人にふれるならば、九〇年代に入っ  
て出入国管理法改正により、ブラジルなどからの出稼ぎが急増し、九〇年代半ばの20万人近い日系人のうち、日系ブラジル人はその7割を占めるに至ったとされている。『OUT』の「弁当工場」で働くブラジル人たちもそれらの出稼ぎ者であり、九〇年代の郊外が彼らとの混住社会を形成するに至ったことも露出させている。

『OUT』の冒頭に近い「弁当工場」に関する一連の文章に長い注釈を施してきたが、これは七〇年代以後に形成されることになった郊外の風景と生活に端を発するもので、新青梅街道を埋め尽くしているロードサイドビジネスの誕生と軌を一にしている。そしてそれらの風景は全国に普及し、郊外の風景を均一化させていったのである。その流れは九〇年代における郊外消費社会の隆盛と繁栄へとつながっていく。

桐野の『OUT』は、均一的な風景によって演出された郊外消費社会の隆盛と繁栄、コンビニエンスなシステムの背後に潜む生産と流通と消費のメカニズムを描き出し

ている。コンビニの弁当はこのようにして工場で生産され、「この工場で働いている限り、心身に溜る鬱屈は何をしても癒されはしない」という労働環境を通じて送り出され、それは不可視のまま消費されていくのだ。そして雅子を始めとしてそこで働くパート主婦たちも工場と同様に、「OUT」状況に置かれていること、それはすなわち郊外消費社会もまた「OUT」状況にあることを告知しているように思われる。

桐野は『OUT』を書くにあたって、実際に「弁当工場」で働いたと伝えられているし、武蔵村山市と新青梅街道を中心とするトポロジーも念入りな取材に基づいていると考えられる。それが第一章の「夜勤」の生々しいリアリズムへと結晶しているのであろう。

今回は『OUT』という物語のフレームとバックヤードに終始してしまったが、次回は登場人物たちと事件に入っていく。

## 2 郊外の孤独な女たち

——桐野夏生『O・U・T』後編〔講談社、一九九七年〕

「弁当工場」で深夜働く4人の主婦たちの名前とプロフィールをまず提出しておこう。

\* 雅子／43歳。会社をリストラされ、再就職先が見つからず、多額の住宅ローンもあり、弁当工場の夜勤パートを選ぶ。後にその会社が信用金庫だとわかる。夫は会社で合わない営業マンの鬱屈を抱え、息子は入ったばかりの高校から退学処分を受け、3人の家族はそれぞれの部屋で重荷を負い、孤独な生活を送る。その小さな家は畑の多い住宅街にある。いつもジーンズに洗いざらしの息子のTシャツやポロシャツを着て、古いカローラに乗っているが、頼れるタイプとの設定。桐野的ハードボイルド・ヒロインの体現。

\* ヨシエ／50半ば過ぎの寡婦。手先が器用で人一倍仕事が早く、工場の仲間から擲楯もこめて「師匠」と呼ばれ

ている。古い木造アパートに寝たぎりの姑と中学生の娘と住んでいる。夫の死亡保険金や貯金も姑のために遣ってしまい、ぎりぎりの生活に追いやられ、辛い夜勤の仕事を辞めることもできずにいる。

\* 弥生／34歳。夜勤者の中で最も美人で可愛い女だが、5歳と3歳の子供がいる。夫がギャンブルに狂い、貯金を使い果たし、3カ月前から給料も家に入れず、暴力もふるわれ、彼女のパート収入で親子3人がかろうじて食べている。その家は弁当工場のすぐそばで、建売住宅の借家である。ヨシエと同じく自転車で工場に通う。

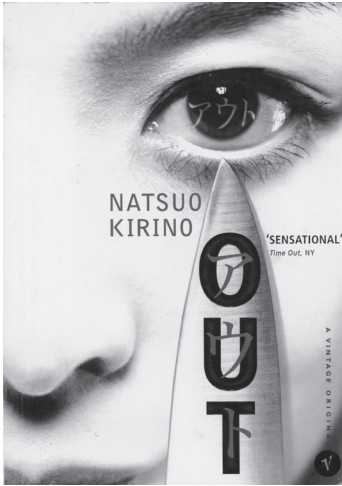
\* 邦子／29歳と自称しているが、実際には「ブスでデブ」の33歳。外車に乗り、持ち物はブランド品が多く、服装にも金をかけていて、クレジットローンに追いかける暮らしを送っている。内縁の夫と古い団地に住んでいたが、夫に逃げられ、サラ金から追いこみをかけられている。

補足すれば、雅子以外は地方出身者であり、また彼女も含め、さしたる学歴も縁故も有しておらず、孤独な環境は共通している。もうひとつ共通項を挙げれば、全員が高度成長期を通過してきたことだろう。

この4人が仲間としてチームを組み、弁当を作るのだ。

それは助け合う仲間がいなければ、このきつい仕事はやっていけないからだ。衛生監視員による粘着テープローラーの背中の埃や塵の除去、手と指のチェック、作業衣への着替え、頭に被るネットと帽子、手と腕の消毒、ビニールの使い捨て手袋と消毒済み手拭き用布巾の用意を経て、コンベアが動かされ、ノルマにうるさい工場主任の管理下に「カレー弁当」千二百食が作られていく。それは次のように描かれる。

四角いご飯を平らに均す者、カレーをかける者、鶏の唐揚げを切る者、それをカレーの上に乗せる者、福神漬の分量を量ってカップに入れる者、プラスチックの蓋をする者、スプーンで留める者、シールを貼る者、細か



い作業がコンベアの下流に沿って連なり、ようやく一個のカレー弁当ができて上がる。

四十代、五十代の多いパート主婦たちの顔色はどす黒く疲れて映り、ぎすぎすした工場は夏でもきつい冷気と様々な食材の匂いにつきまとわれていた。トイレにいくにも交代で、二時間近く待つこともあり、朝までコンクリートの上で立ち仕事が続くのだ。「だから、ひたすら自分を<sup>いた</sup>ら、仲間同士で助け合い、なるべく楽な動きをしなければならぬ。それが体を<sup>ぶ</sup>壊さずにこの仕事を長く続ける秘訣だった」。「カレー弁当」が終わると、次には詰める物が多いので、ラインが長くなる「特製幕の内弁当」二千食が続くのだ。人間の生活や身体を保つ食が生み出されていく場ではなく、機械的に無機質な物が生産されていく過程に立ち合っているかのようだ。

彼女たちは様々な事情とトラウマを抱え、「不夜城」のような工場でロボットのよう働いている。それだけでなく、仕事から離れても、彼女たちはロードサイドビジネスに包囲され、生活していることが物語の中に埋めこまれ、郊外消費社会の住人の生活が浮かび上がってくる。

邦子は午後になって起きると、団地の入り口のところにあるコンビニで、「特製幕の内弁当」を買う。それは会社、

工場、出荷の時間表示からして、自分たちのラインが手がけたものに相違なく、彼女はその弁当をテレビを見ながら機械的に、しかも「洗う余地のないほど綺麗に食べ終わつた」。それから邦子は東大和のパブの面接に出かけ、断わられ、腹をたてたけれど、車代をもらったので、牛丼屋に入る。これが夕食代わりであろう。

ヨシエの高校生の娘は駅前のファストフードで夏休みのバイトを決めていた。時給は弁当工場の昼間よりも高く、「若いということとはそれだけで価値がある」のだ。朝食もコンビニで売っている、その代わりに食物だというアルミカップの飲み物ですませている。

雅子の息子もダイニングテーブルでコンビニ弁当を食べている。それも邦子の幕の内弁当と同じ表示があつた。ただちがうのは出荷時間で、それは昼間のものだった。「夕食が支度されていることが家の存在証明だ」と雅子は考えていたが、それもはや成立しなくなる時期が近づいているのだから。

コンビニやマクドナルドといったファストフードの他にも、ファミレスも頻繁に登場し、ロイヤルホストなどの具体的な名前も挙げられ、『OUT』の舞台である武蔵村山市周辺がロードサイドビジネス王国だとわかる。

前編で資料として挙げておいた『2002-3年版首

都圏ロードサイド郊外店便利ガイド』（昭文社）の武蔵村山市と東大和市と小平市、及びそれらを貫いている新青梅街道を参照しながら、この『OUT』論を書いているのだが、新青梅街道のみならず、そこに掲載された他の主要幹線道路もまたロードサイドビジネスで埋め尽くされている。それらを見てみると、雅子や邦子がこの中を車で走っているシーンが目に見え、浮かんできると、そこに出てくるファミレス、ファストフード、団地、公園、工場、様々な施設なども実際に類推できるし、この中から『OUT』の物語が立ち上がってきたのだと実感させられる。

これらが郊外消費社会を支えるコンビニの「弁当工場」で、夜勤パートとして働き、それぞれが特有の孤独を抱え、ロードサイドビジネスに埋め尽くされた地域に生きることを宿命づけられた女たちの肖像である。そしてそこには同じように孤独な日系ブラジル人カズオもいて、雅子は彼のミューズのような存在なのだ。混住社会としてのコンビニの「弁当工場」は、パート主婦と日系ブラジル人たちによって支えられている。その両者の孤独が郊外消費社会にも反映され、コンビニの弁当には近代の家庭の死のイメージがこめられているといったら、考え過ぎであろうか。

しかし彼女たちは「良妻賢母の典型」である弥生が夫を殺したことによつて、急激に変わり始める。さらに「OU

「T」へと追いやられるといつていいかもしれない。雅子は弥生の「あたし、あの人、殺しちゃったの」という電話を受ける。それを雅子は「紛れもなく凶兆」だと思ったが、弥生を助けるしかないという決意に至る。その理由は「弁当工場」の「助け合う仲間」であると同時に、家庭の崩壊と孤独を共有しているからだ。そして雅子は死体の始末を考え、バラバラにし、生ゴミとして捨てようとする。だがそれは弁当のラインと同様に、「仲間がいなければ、このきつい仕事はやっていけない」。かくしてヨシエが仲間に加わり、それから邦子も続くことになる。そこに桐野は絶妙な次のような一節を挿入している。それは「夜勤の仲間には夜に会う。だから昼間の仕事はどこか胡散臭かった」というものだ。

死体の解体は雅子の家の風呂場で実行される。そのために彼女は工場からビニールエプロンとビニール手袋をくすねてきていた。弁当が無機質な物として扱われるように、死体も同じ物としてラインに置かれ、解体されるのだ。多額のローンによって購入された郊外のマイホームが殺人死体の解体の場となるのだ。郊外消費社会の家庭のいたるところに死が埋まっている。それは信じていいことなんだと『OUT』の物語は告げているかのようだ。

そしてこの弁当のラインの延長である死体処理をきつ

けにして、やはり雅子を郊外のミューズのようにして、孤独なサデイズトやロリコン男が引き寄せられ、死体処理ビジネスへと展開されていく。つまり「OUT」はとめどなく拡がり、死の影は彼女たちにも忍び寄っていくことになる。

『OUT』は「クライム・ノベル」と銘打たれているが、むしろ郊外消費社会が生み出した女性たちを主人公とする、プロレタリア主婦小説のように読むことができよう。『OUT』(Translated by Stephen Snyder, Vintage, 2004)は英訳が出されているが、言及してきた郊外消費社会の孤独の襞と細部はどのように訳されているのか、一度確かめてみたいと思う。

### 3 米軍基地とセクシュアリティ

——山田詠美『ベッドタイムアイズ』

〔河出書房新社、一九八五年〕

カ探検』（サンドケアー出版局）の中に、次のような一節がある。「郊外の閑静な住宅地の隅に、商店街を抜けた路地の向こう側に、滅多に人の訪れないうっそうとした森の中に、そして、都心の一等地に米軍施設は何の前触れもなくこつ然と現われる」と。それに付け加えれば、東京首都圏の郊外消費地帯の近傍に米軍基地が必ず位置し、つまり郊外消費社会と基地は混住しているのだ。

前回桐野夏生の『OUT』を論じるにあたって、『2002-3年版 首都圏ロードサイド郊外店便利ガイド』（昭文社）を手元に置き、参照していたことを既述しておいた。これはロードサイドビジネス900チェーンの、首都圏における2万店近くを掲載したものだ、それを繰っている。と、否応なく米軍基地の存在が目に入ってくる。『OUT』の主たる舞台である武蔵村山市は福生の横田基地と隣接しているし、神奈川県を見れば、広大な横須賀、座間、厚木基地、米軍の住宅専用地区としての相模原ハウジング、根岸ハイツなどがあり、それらの周辺は、これもアメリカ力を出自とするロードサイドビジネスが明らかに旺盛な増殖を示していて、両者の密通と共存をほめかしているかのようだ。

「在日米軍基地完全マニュアル」とサブタイトルが付された、サブカルチャー研究会編『フェンスの向こうのアメリカ

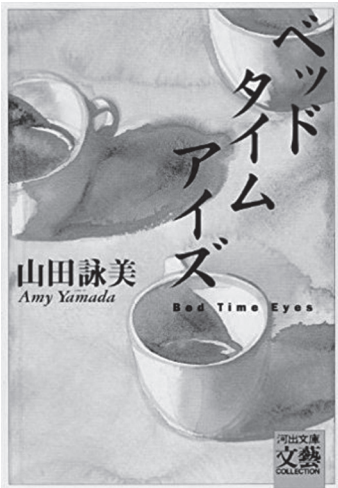
戦後文学における基地と郊外について、『（郊外）の誕生と死』で、小島信夫の『アメリカン・スクール』（新潮文庫）や村上龍の『限りなく透明に近いブルー』（講談社文庫）に言及しておいた。だがそこでふれられなかったのが、田中康夫の『なんとなく、クリスタル』（河出文庫）と山田詠美の『ベッドタイムアイズ』であり、前者はその物語のクロージングにおいて、唐突な一節「ちよūd、一台のカーキ色をしたトラックが、走りすぎていく」が挿入され、「横浜には、米軍基地があります」との注が付されている。それはヴァニティな八〇年代の日本の消費社会がアメリカとの共存によって支えられているという認識に他ならず、田中が横田基地を意識せざるをえない郊外の一橋大学生であつたことは偶然ではない。

だがここでは後者の『ベッドタイムアイズ』を取り上げてみる。この作品こそは横須賀基地を脱走してきた黒人兵



士のスプーンと日本人ジャズシンガーのキムの出会いと同棲と別れを描いている。「デイック」や「コック」が語られ、「プッシィ」や「フアック」も頻出し、実際に「フアック」の場面も何度も反復されているが、そこに『ベッドタイムアイズ』のコアを見てはならない。それは物語の表層の出来事であり、真のテーマは「Crazy about you」という言葉に象徴される、スプーンとの関係を通じて様々に揺らめくキムの心的現象をカレードスコープのように浮かび上がらせることにある。言い換えれば、山田詠美は一貫して、その特有な「girl meets boy」の愛のかたちとセクシュアリティの揺曳を描いてきたといえるのではないだろうか。

山田詠美に関しては、拙著で『晩年の子供』（講談社文



庫)、私のブログ「出版・読書メモランダム」の「消費社会をめぐる」8で『学問』（新潮文庫）にすでにふれ、そのような彼女の資質のよってきたるところが、戦後の初期の郊外の少女だったことに求められるのではないかという推論を提出しておいた。それと同時に、彼女と同時に在校したわけではなかったけれど、山田詠美が私の小学校の後輩であることも。つまり彼女と私は初期の郊外の先住民的風景を共有していたことになる。

それゆえに彼女のセクシュアリティの行方が、農村や漁村の少年から米軍の黒人兵に向かっていくことを、それなりに理解できるように思われる。しかしそのように理解していても、『ベッドタイムアイズ』の中に、スプーンとキムの関係の中に、アメリカと日本、米軍基地と戦後日本社会のメタファーを、強く読み取ってしまうのだ。この作品は次のように始まっている。

スプーンは私をかわいがるのがとてもうまい。ただし、それは私の体を、であって、心では決して、ない。私もスプーンに抱かれる事は出来るのに抱いてあげる事が出来ない。何度も試みたにもかかわらず、他の人は、どのようにして、この隙間を埋めているのか私は知りたかった。

この書き出しの数行に『ベッドタイムアイズ』の物語のコアが凝縮されているし、その後の展開もそれに沿って進んでいく。だがこの「スプーン」をアメリカ、「私」を日本に言い換えると、それは敗戦から現在まで続いているアメリカと日本の関係を象徴し、物語っているようにも思えてくる。それに何よりも「スプーン」は横須賀基地の黒人兵士という設定であるし、二人は「基地のクラブ」で初めて出会い、その立入禁止のポイラー室で「ファック」するのだ。

そして二人の関係が始まり、それが「私」のモノローグとともに進行していく。

スプーンとも、もう馴れ合い始めている。彼とのメイクラブの後はいつも甘い敗北感が残る。

ダイスが転つてゲームが始まったような気がする。だけれど、こんな深刻なゲームが今までにあつたかしら。

まったく彼は私の教育者たる地位を築き始めていた。

スプーンの小さなおもちゃになる事を楽しみ始める。

トイは気まぐれなキッズにたたきつけられ、もてあそばれるように、その痛みを楽しみ始める。

彼はファックしか方法をしらない！

どうやってやるんだろう。どうやってお前を気分良くさせられるんだ。やる以外にどんな方法があるかってんだよう。きつとスプーンは心の中でこう叫んでいるに違いない。

まだまだこうしたメタファーに充ちた文章はとめどなく挙げられるが、このくらいにしておこう。このような「私」のモノローグをたどっていくと、『ベッドタイムアイズ』が書かれた後の九〇年代になって、日米構造協議に続いて、アメリカから「年次改革要望書」が出されるようになり、それらとかさなつてしまうかのような錯覚感に捉われる。

これは拙著『出版業界の危機と社会構造』（論創社）でも言及しておいたけれど、第二の敗戦や占領につながるもので、それはしかもアメリカと日本政府の「馴れ合い」によつて進行し、「甘い敗北感」どころではない「苦い敗北感」をもたらした。このような「深刻なゲーム」が「教育者」然としたアメリカ主導によつて行なわれ、日本は「おもちゃ」のようにもてあそばれ、「ファック」に犯されてしまったともいえるのだ。私たちはそうした敗北の風景の中に佇んでいるのであり、前回の『O.U.T』の物語とはその一端であることを忘れてはならない。

しかしこのような「私」のモノローグとは対照的に、「スプーン」に向けられた彼女の客観的眼差しをも記しておくべきだろうし、それは山田詠美が初期の郊外で少女時代に学習した、混住社会における支配と被支配の關係、その性を絡めたメカニズムに対する洞察に起因しているようにも思える。「スプーン」は「素適な体」で「粹」<sup>クワイ</sup>「だけど、ハーレム育ちの黒人で、脱走兵という設定であり、彼の体臭は「不快でないのではなく、汚ない物に私が犯される事によつて私自身が澄んだ物と気づかされるような、そんな匂い」なのだ。それでいて、彼は「滑稽」で、「悲しい思いをして来た」存在のように見えた。それゆえに「大胆不敵な不良の女」は「あんたの女」になるのだが、次第にどちらの「付属品」なかわからなくなっていく。それは「マリア姉さん」が介在することで、さらに複雑な様相を呈してくる。

とすれば、「スプーン」と「私」に、アメリカと日本の關係を読み取ることは単純すぎる誤解でしかないようにも考えられる。「マリア姉さん」や「どこかの大使館」、刑事らしい外国人と日本人の五人の男女は、何のメタファーとすべきなのだろうか。

他の作品も同様であるのだが、この山田詠美の処女作『ベッドタイムアイズ』は、八〇年代においてしか出現し

なかつた奇妙な難解さに充ちたエレガントな小説であり、それはひとつの混住の新しいかたちを提示していたからなのかもしれない。それらを含め、『ベッドタイムアイズ』はまだ十全に読み解かれていないようにも思える。

#### 4 村と黒人兵

——大江健三郎『飼育』〔文藝春秋、一  
九五八年〕

私は『〈郊外〉の誕生と死』において、当初の構想では第4章「郊外文学の発生」を大江健三郎の『飼育』から始めるつもりでいたのだが、彼の作品は次回言及する『万延元年のフットボール』も含め、スペインの長い郊外や消費社会の前史に位置づけられるので、この章が長くなってしまうこともあり、見送らざるをえなかった。

それに加えて、大江の作品と文体には他の作家たちと異なる特有の呪縛力が秘められていること、とりわけ『飼育』にはかつて原文でも読んだビエール・ガスカールの『種子』（青柳瑞穂訳、講談社、一九五七年）の明らかな影響が見てとれ、そちらも論じていくとテーマがずれてしまうことも危惧されたからだ。またあらためて私たちの戦後世代に対して、大江文学がもたらした比類なき波紋と影響も思い出されたし、中上健次や村上龍はもちろんだが、それは前回取り上げた山田詠美に至るまで続き、彼女も大江文

学の強度な引力圏を経てデビューしたことは明白で、『ベツドタイムアイズ』にしても、大江の『飼育』を抜きにして成立しないようにも思える。それゆえに江藤淳は『ベツドタイムアイズ』を称揚したのではないだろうか。

『飼育』は戦時下における思いがけない混住を描いた、大江文学のコアにして根底に横たわる作品とよんでもいい。ここでの混住は黒人兵という他者を得ることで成立し、ひとつの神話のような光景をエピファニーさせている。まず谷間の小さな村が霧の中から浮かび上がってくるように姿を現わす。季節は洪水のように降り続いた梅雨の後だ。

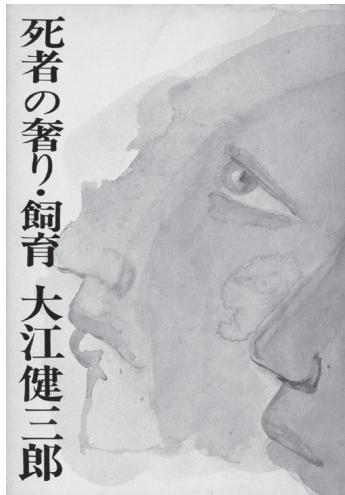
(……) 僕らの村から《町》への近道の釣橋を山崩れが押しつぶすと、僕らの小学校の分教場は閉鎖され、郵便物は停滞し、そして僕らの村の大人たちは、やむをえない時、山の尾根づたいに細く地盤のゆるい道を歩いて《町》へたどりつくのだった。(……)

しかし《町》からすつかり隔絶されてしまうことは僕らの村、古いが未成育な開拓村にとって切実な悩みを引きおこしはしなかった。僕ら、村の人間たちは《町》で汚い動物のように嫌われていたのだし、僕らにとつて狭い谷間を見下す斜面にかたまっている小さな集落にあらゆる日常がすつぱりつまっていたのだ。しかも夏の始め

—— だった。子供たちにとって分教場は閉じられている方がいい。

これが「僕らの村」なのだ。そしてこの時代に「村」と「町」はまったく別の世界、異なるトポスであり、「道」や「橋」によつて、かろうじてつながっているものだった。そのような「村」と「町」のトポロジーと棲み分けは、一九五〇年代までは日本のどこでも見られた風景に他ならなかった。それゆえに、ガスカールの『種子』の主人公の少年の言葉を借りれば、「町を発見すること」にもなったが、それでいて「村」という「小さな集落にあらゆる日常がすっぽりつまっていた」。

大江はその「村」に生きる「僕ら」を、ガスカールの



『種子』をそのまま投影させ、「僕も弟も、硬い表皮と厚い果肉にしつかり包みこまれた小さな種子、柔かく水みずしく、外光にあたるだけでひりひり慄えながら剥がれてしまう青い種子なのだった」と形容している。戦争のために若者たちが不在な「村」に時々郵便配達夫が彼らの戦死の通知を届けにきた。そうした「村」の上空に「珍しい鳥」のように敵の飛行機が通過し始めていた。父は狩猟で得た獲物を「町」の役場へ渡すことで生計を支え、「僕ら」は「村」の中央にある共同倉庫の二階の養蚕部屋に住んでいた。

ある日の夜明けに激しい地鳴りとすさまじい衝撃音が起きた。敵の飛行機が山に落ちたのだ。大人たちは敵兵を探すために、猟銃を手にして山狩りに向かった。女たちは暗い家の奥に身を潜め、「村」には大人たちがすつかりいなくなり、「子供たちだけが陽の光の氾濫に溺れている。僕には不安に胸をしめつけられた」。弟は「夢みるように」いう。「敵兵はどんな顔だろうなあ」「死んでなかったらいいがなあ」「掴まえて来てくれるといいがなあ」と。

子供たちにとって「敵兵」は閉ざされた「村」における「期待」の出来事、事件を象徴するものとして捉えられる。いふなれば、まれびとがやってくるような「期待」なのだ。「僕は期待で気が狂いそうだった」。あたかも神の降臨を待

ち望んでいるかのようだ。それは新聞やラジオも普及していないかった「村」にとつては大人たちも同様であり、そのような「村」の感覚とは、テレビが普及する以前の五〇年代までは続いていたものだったと思われる。

それから不安な期待に音を潜めている「村」に最初の宵闇が訪れ、そこに大人たちに囲まれ、両足首に猪鬃の鉄くさりをはめこまれた「黒い大男」||「獲物」||「敵」が現われてきた。そして「村」の倉庫での黒人兵と子供たちとの「混住」||「飼育」が始まるのである。

黒人兵は「町」の意向が判明するまで、「村」で「獣のように飼う」ことが決められる。ここで留意しなければならぬのは、先験的に「村」が「町」から疎外、もしくは隔絶された地域として存在していることだろう。「村の人間たちは《町》で汚い動物のように嫌われていた」という一文は、そのことを告げている。「獣同然」で、「牛の臭いがある」黒人兵は「汚い動物」のような「村の人間たち」のまさに隣人的存在であり、それゆえに「村」で子供たちと一緒に住み、「飼育」されるのだ。

「町」の人間から「蛙」と呼ばれる「僕」は地下倉の黒人兵を常に監視し、食物を与え、観察する。柱に太い鎖でつながれた、うずくまっていた黒人兵は食物を貪婪にむさぼり食う。そうしているうちに、黒人兵の処置は「町」では

なく、県庁に委ねられ、それが決定するまで、「村」で彼を保管しておかなければならないということになった。そのため監視、世話、観察を通じ、「僕ら子供らは黒人兵にかかりきりになり、生活のあらゆる隅ずみを黒人兵でみたしていた」。そして「家畜のようにおとなしい」黒人兵と子供たちは、身ぶりや夏の暑さも共有し、「《人間的》なきずなで結びついた」と思われた。

次第に黒人兵は地下倉から自由な外出も許可されるようになり、女たちからも食物を与えられ、「村の生活の一つの成分になろうとしていた」。し、狩猟にまつわる技術を核にして、「僕と弟と黒人兵と父とは一つの家族のように結びついた」。夏の盛りに黒人兵の濃密な体臭が地下倉にこもるようになり、子供たちは彼を「村」の泉に連れていった。そして一緒に裸になり、水浴びし、黒人兵の「美しいセクス」に水をぶっかけたり、山羊と淫らに戯れもした。黒人兵は「たぐいまれなすばらしい家畜」だった。

僕らがいかに黒人兵を愛していたか、あの遠く輝かしい夏の午後の水に濡れて重い皮膚の上にきらめく陽、敷石の濃い影、子供たちや黒人兵の匂い、喜びに嘔れた声、それらすべての充満と律動を、僕はどうか伝えればよい？



そうした夏の祝祭はいつまでも終わることなく続いていくように感じられた。

だがしかしその翌日、村における黒人兵との「一つの家族のように結び着いた」関係に突然終止符が打たれる。黒人兵を梟に引き渡すことが伝えられ、「村」の人間たちが彼を「町」まで降ろさなければならなくなったのだ。子供たちは打ちのめされた。「黒人兵を引渡す、そのあと、村に何が残るだろう、夏が空虚な脱げらになつてしまふ」といつて「僕にどうすることができよう」。

その時、黒人兵は急に立ち上がり、「僕」をつかまえ、地下倉に駆けおり、揚蓋を降ろした。「僕は痛みに呻いて黒人兵の腕の中でもがきながら、すべてを残酷に理解したのであった。僕は捕虜だった。そしておとりだった。黒人兵は《敵》に変身し、僕の味方は揚蓋の向うで騒いでいた。そのうちに地下倉は夜の長い闇に包まれていったが、翌朝になって、大人たちが地下倉になだれこみ、父が「僕」を「捕虜」とする黒人兵に鉦を振り降ろし、「僕は自分の左掌と、黒人兵の頭蓋の打ち碎かれる音を聞いた」。黒人兵の死体は谷間の廃坑へと運ばれていった。「村」には黒人兵の死体の匂いが充満しているようだった。「鉦をふるつて僕に襲いかかった大人たち、それは奇怪で、僕の理解を拒み、嘔気を感じさせ」たし、「僕はもう子供ではない、と

いう考えが啓示のように僕をみたした」。

それは「敵」にして「まれびと」である黒人兵との「混住」―「飼育」を通じてもたらされた、子供たちの村における祝祭の日々の背景に、あらためて戦争が続いていたことを露出させている。黒人兵の死に続く「町」の書記の死もそれを象徴している。戦争は終わりに近づいているにしても、このようにして、戦場ではない「村」にも「町」にも、残された大人や子供たちにも戦争を露出させ、死の匂いと痕跡を揺曳させているのだ。それは「僕」が「子供」ではなくなるビルドゥングスの過程でもあった。そうした記憶をたどりながら、『飼育』は書かれたように思える。クロージングに近い一節を引用し、それを示すことで、この一文を終えよう。

戦争、血まみれの大規模な長い闘い、それが続いているはずだった。遠い国で、羊の群や刈りこまれた芝生を押し流す洪水のように、それは決して僕らの村には届いてこない筈の戦争。ところが、それが僕の指と掌をぐしゃぐしゃに叩きつぶしに来る。父が鉦をふるつて戦争の血に身体を酔わせながら。そして急に村は戦争におおいつくされ、その雑沓の中で、僕は息もつけない。

## 5 スーパーマーケットの誕生

——大江健三郎『万延元年のフットボール』

〔講談社、一九六七年〕

日本の戦後社会の大文字のストーリーは民主主義、文化国家のスローガンに始まり、それは高度成長期へとシフトしていった。しかしそのかたわらにあったのは敗戦と占領、それらに起因するアメリカ人たちとの混住、そして彼らによってもたらされた、世界に例を見ない急速な消費社会への移行だった。

これは繰り返し書いていることだが、一九九〇年代に経済学者の佐貫利雄の『成長する都市 衰退する都市』（時事通信社、一九八三年）に収録された「日・米就業構造の長期的変動」の図表を見ていて、アメリカの五〇年代と日本の八〇年代の産業構造がまったく重なり合うことに気づいた。それは第三次産業就業人口が50%を超える消費社会化を意味し、アメリカによる日本の占領とは、消費社会による農耕社会の征服だったことを告知していた。八〇年代の日本は全国的なロードサイドビジネスの展開と増殖によつ

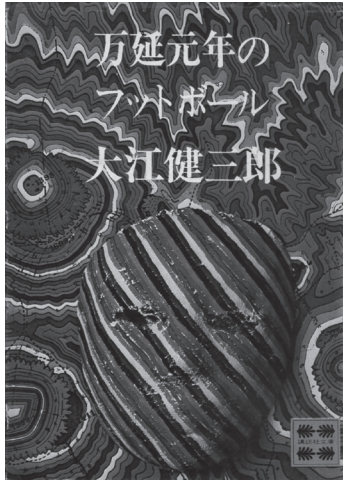
て、風景が変わってしまい、アメリカ的郊外消費社会が出現し、また東京デイズニールランドも開園し、真の意味での占領が完成した時代でもあった。すなわちそれが日本の戦後社会の無意識的な命題ではなかったかという考えに至り着いた時、私は感慨を禁じ得なかった。

そしてあらためてひとりの作家が五〇年代から六〇年代にかけて、先駆的に戦争と農村、敗戦と占領、混住と消費社会を一貫して描いてきたことを想起した。それは作家の意図がどうであれ、優れた小説は社会科学書以上に、否応なく時代の現在とその行方を深く幻視してしまうという思いでもあった。その作家とはいってもなく大江健三郎であり、作品は『万延元年のフットボール』に他ならない。これは前回の『飼育』と主人公兄弟や舞台を同じくするもので、その続編、後日譚としても読めるのではないだろうか。『飼育』が戦争中の「村」における黒人兵との混住を描いていることに対し、『万延元年のフットボール』は敗戦、村、アメリカ、消費社会が主たる物語コードを形成し、前消費社会の到来の揺らめきを伝えようとしているようにも思える。

それは『万延元年のフットボール』が大江文学のひとつの集大成にして、新しい神話の創造だとされるにしても、「スーパーマーケット小説」、または郊外消費社会前史を彷彿

佛させる作品にも相当しているからである。そうした意味において、この小説は多様な読み方を喚起する作品として在り続けているともいえよう。そのような視点から、『万延元年のフットボール』を読んでみよう。

この作品の1は「死者にみちびかれて」という章題で、「夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い『期待』の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」と書き出されている。またしても「期待」だ。『飼育』の中でも、子供たちは敵兵の到着を待ち、「期待」で気も狂わんばかりだったし、「死者」とはあの黒人兵のイメージを引きずり、小学生の一団の石礫によって右眼の視力を失った主人公の「僕」＝蜜三郎とは、鉈で左手をつぶされた「僕」の後身ではないだろうか。



物語としての『飼育』と『万延元年のフットボール』の間には二十年以上の時間が流れている。それはまさに日本の戦後社会史を通貫して、一九四五年の敗戦から六〇年安保を経て、後者の物語と書かれた時代を重ねるとすれば、六七年頃までが物語の歴史軸として設定されていることになる。それが高度成長期とパラレルであることはいうまでもないだろう。『飼育』からたどっていけば、二人の兄弟は谷間の村を出て上京し、大学に入り、兄の蜜三郎は野生動物資料の翻訳者、弟の鷹四は安保闘争に参加し、学生演劇団のメンバーとしてアメリカに渡った。兄はアルコール中毒の妻と知恵遅れの息子がいる。そして弟がアメリカから帰国するところから、物語が動き出す。

そこで兄弟は2のタイトルにある「一族再会」を果たすと同時に、お互いに新しい生活を始める必要性を伝え合う。兄はいう。「いうまでもなく、僕は新生活をはじめた。しかし、僕の草の家がどこにあるかということが問題だ」。弟はそれに応えている。「東京でやっているすべてのことを放棄して、おれと一緒に四国へ行かないか？ それは新生活のはじめ方として悪くないよ」。兄弟の姓は根所なのだ。それに柳田民俗学の引用からして、『万延元年のフットボール』のテーマのひとつが、日本人のルーツ探求でもあることも暗示している。

小田光雄（おだ・みつお）

1951年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。出版業に携わる。著書『〈郊外〉の誕生と死』（青弓社、復刊・論創社）、『図書館逍遙』（編書房）、『書店の近代』（平凡社）、『出版社と書店はいかにして消えていくか』などの出版状況論三部作、『古本探究Ⅰ～Ⅲ』『古雑誌探究』『出版状況クロニクルⅠ～Ⅳ』、インタビュー集「出版人に聞く」シリーズ（いずれも論創社）、訳書『エマ・ゴールドマン自伝』（ばる出版）、エミール・ゾラ「ルーゴン＝マッカール叢書」シリーズ（論創社）などがある。個人ブログ【出版・読書メモランダム】<http://d.hatena.ne.jp/OdaMitsuo/>に「出版状況クロニクル」と「古本夜話」を連載中。

## 郊外の果てへの旅／混住社会論

---

2017年5月20日 初版第1刷印刷

2017年5月25日 初版第1刷発行

著者 小田光雄

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装丁／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1623-4 ©2017 Oda Mitsuo, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。